

日 本 語

III

日 本 語

III

東京外国語大学附属日本語学校教材開発研究協議会

会 長 半田 一郎

伊藤 芳照

大木 隆二

川合 淳介

川瀬 生郎

河原崎幹夫

北沢 綾子

小林 幸江

杉原 正勝

鈴木 忍

高橋 睦

豊田 豊子

姫野 昌子

松井 信行

松岡 弘

村崎 恭子

守屋 宏則

吉岡 英幸

吉川 武時

吉原 久夫

事務担当 犬伏 慶二

日本語 III

定価 500円

昭和54年9月1日初版発行

著作編集者 東京外国語大学附属日本語学校
教材開発研究協議会

代表者 鈴木 忍

〒183 東京都府中市住吉町5-10-1

電話 0423-65-0311

印刷発行 株式会社 凡人社

代表者 田中久光

〒102 東京都千代田区麹町6丁目2

(麹町6丁目ビル6階)

電話 03-265-7782~3

©JAPANESE LANGUAGE SCHOOL

Tokyo University of Foreign Studies Fuchu Campus, 1979

ま え が き

1. この「日本語Ⅲ」は、東京外国語大学附属日本語学校において日本語を初歩から学ぼうとする留学生を対象として編集した「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」に続く日本語学習書である。
2. 本書は、本校編の「にほんごのはつおん」「ひらがなとかたかな」「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」のあとを受けて、日本語の一般的な現代文に習熟させることに目標をおいている。
3. 本書は、本校の年間カリキュラム第三学期中に、授業時間約120時間をかけ、終了することを予定して編集してある。「日本語Ⅰ」から「日本語Ⅲ」までを学習することによって、留学生が日本の大学に進学した後、日本語による学習活動ができる最低限の能力を獲得させようとするものである。
4. 本書は12課から成っている。とりあげた題材は、評論、論説、文学作品等、文化的なもの、社会的なもの、科学的なもの、文学的なものなどで、広い分野から、言語生活が円滑に営まれる能力を養うのに必要と思われるものを選び提出した。

5. 各課はそれぞれ、「本文」と「新しい言葉」「新しい漢字」とから成っている。また、必要と思われる語句には、「本文」の終わりに「注」を付し、学習の便を図った。
6. 本書では、「本文」および「注」において、新たに語い約2800語を提出した。新出語いは、各課の終わりに「新しい言葉」としてまとめた。なお、本書全体に提出された新出語いは巻末に「語いさくいん」としてまとめた。新出語いは、「日本語Ⅰ」で、約1500語、「日本語Ⅱ」では、約3700語が提出されているので、総語い数は、約8000語になる。
7. 漢字は、新出222字、読みかえ190字を当用漢字表から選んで提出した。各課において提出された新出漢字と読みかえ漢字は、それぞれ各課の終わりに「新しい漢字」としてまとめた。なお、本書全体に提出された新出漢字は巻末に「新出漢字表」としてまとめた。欄外に書き出した漢字は、新出と読みかえ漢字で、新出漢字はそのまま、読みかえ漢字には下線をつけて示した。各課の終わりの「新しい漢字」においても、新出漢字はそのまま、読みかえ漢字には下線をつけ、さらに既習漢字には○の印をつけて、それぞれを区別した。

漢字は、「日本語Ⅰ」では、新出350字、読みかえ129字、「日本語Ⅱ」では、新出920字、読みかえ480字が提出されているので、総漢字数は、新出1492字、読みかえ799字になる。

8. 本書に採録した作品は、できるだけ原文に忠実であるように心掛けたが、教育的配慮から一部割愛削除したものもある。また、表記は、かなづかいについては、現代かなづかいにより統一し、漢字については、当用漢字表、当用漢字改訂音訓表を基準としているが、音訓表のうち「付表」にあるものは、ふりがなをつけて提出することを原則とした。

9. 本書の編集に際し、作品の採録を御許可くださった原著者の方々に心より感謝申し上げます。

10. 本書の編集には、もっぱら鈴木忍ほか巻末に記した者がこれに当たったが、本書の成立するについては本校教職員はもとより、外部の方々からもなみなみならぬ御助言・御助力のあったことを付記しておく。

目 次

1. 文明の国スウェーデン	中根千枝.....	1
2. 教養とは何か	永井道雄	20
3. ことばの意味	渡辺 実	31
4. 身体に関する言い回し	芳賀矢一	41
5. 新聞の役目と社説		
(1) テレビ・ラジオ時代の新聞	長谷部 忠	49
(2) 社説	毎日新聞	54
6. 機械との共存	高木純一	64
7. 走れメロス	太宰 治	73
8. なんでも見てやろう	小田 実	101
9. 陰影の美	谷崎潤一郎	112
10. 風立ちぬ	堀 辰雄	121
11. 科学と人間の福祉	都留重人	137
12. 現代都市の生活構造	篠原 一	153
語 い さ く い ん		162
新 出 漢 字 表		180

1 文明の国スウェーデン

なか　ね　ち　え
中　根　千　枝

20世紀後半の現在、世界は、生活水準の向上を目ざして、科学の発達と相まって、一路機械化への道を、そして福祉国家への道を上昇している。こうした現象はいつたい、人間にどんな影響をもたらすであろうか。

わたしがストックホルムに着いた時、いろいろな国際会議が重なって、ホテルは超満員で、部屋がとれなかった。ちょうど親切な友だちが、その叔母おばさんが留守だからというので、一人用のモダンなフラット（アパート式住宅）を貸してくれ、わたしは2週間ばかりそこに滞在した。なにしろ、インドの辺境生活から出て来たばかりの時だったので、初めはそのモダンなフラット生活を大いに楽しんだ。

そのフラットはストックホルムの西方の閑静な美しい住宅街にあった。下にデンマーク料理の小さなしゃれたレストランがあって、その横の総ガラスのドアを押して、スマートなかわいい自動式のリフトで6階にのぼる。一分のすきもない、きれいなドアのかぎをあけると、左側に玄関に必要なちょっとした家具があり、真ん中は奥

社　昇　超　滞

まで1メートル半ほどの幅の廊下がついており、その右側の白いドアをあけると、2メートル四方ほどの完備した台所、次のドアをあけると、ゆっくりしたタイル張りのバスルーム・洗面所・トイレット、そして奥の突き当たりのドアをあけると、15畳ほどの寢室兼居間となっている。居間の正面は全部ガラス張りで、厚地のレースのカーテンがかかっており、その外にはベランダがついている。九月だというのに、スチームが通っており、自由に調節できる。全く快適な一人住まいである。さて、バスに入るときには、水道の栓をひねり、もう一つの熱湯の栓（ストックホルムの新しいビルディングには、水道と全く同じように熱水道が来ているから、お湯など沸かす必要がない。）をひねって、両方から水とお湯が出た瞬間、温度計がぐっと上がって、手を触れずに温度の調節ができる。台所の近代化は言うまでもない。汚物を捨てるにもボタン一つ押せば、ぽっかり大きな穴が地下まで続いている。何でもそこに投げ込めばよいから、世話はなし。そして用件はすべて電話ですます。ストックホルムの典型的な生活だ。

しばらくこの快適な生活をしているうちに、何だか自分が機械化され、物質の一部になっていくような気がして、変ないらだたしさ

を覚え始めた。ある日、久しぶりにご飯をたこうと思って、食糧品屋に行って米を求めると、1キロほど入った角砂糖の箱のようなもので、真ん中がセロファンで中身のお米がわかるようになっている箱を渡された。何だかお米という感じがしないと思いながら、帰っておなべにあけてみると、どうも機械かなんかですっかり洗ってあるらしく、一粒一粒がピカピカ光って、まるで薬かなんかのようだ。かしいだけけれど、水はほとんど透明で、いったい、味があるのかしらと思う。久しぶりに食べるご飯だったので、おいしいような気もしたが、あのピカピカの薬のような粒を連想して、化学薬品のようなあじけなさがしてきた。お米ばかりではない。野菜もそれはそれはきれいに、土の気など薬にしたくてもないようになっていて、またそれを上等の紙で包んでくれるから、土に生えた植物という感じがなくなってしまふ。それをまた、ひどく非人間的なフラットで、クッキングして、窓からコンクリートのビルディングを見ながら食べるのだから、だんだんやりきれなくなってきた。わたしはインドのにぎやかなバザールで、砂やもみがらがまじっているような米を、路傍で農民から買う喜びをしみじみ懐かしく思ったり、土の香のする日本の八百屋で買うほうれん草やじゃがいもがひどく恋しくなっ

糧 透 傍 香

たりした。

インドや日本では、生活水準は低いけれど、人々は決して孤独ではない。機械より人間が氾濫^{はんらん}し、人間にとって全く自然な土のにおいがする。ヨーロッパに着いて以来、私はひどく土を恋しく思った。都会のヨーロッパ人は石やコンクリートの家に住み、道は石畳かアスファルト。都会にいと、この地球に土というものがどこへ行ってしまったのかと思う。くつなど1週間みがかなくても少しも汚れないことは、不精なわたしにはうれしいけれど、土のにおいが全然ないということは、農耕文化を基盤とした日本人にはひどく寂しい感じがする。日本にいたときは、東京郊外のどろんこの道を歩かされてぶつぶつ言ったものだ。インドはこれまたひどく、日本より何倍も土くさい所だった。台所の床は土だし、食器をみがくにも土を使う。長距離列車に乗ると、よく女の人が一塊の土を持って乗る。自分のコップやお弁当箱を洗うためである。だからあらゆる所で土を見る。それに比べてヨーロッパは肉とバター・ミルクのにおいだ。牧畜文化という、わたしたちと異なる文化の基盤を持っていることをしみじみ感ずる。ところで、コンクリートの中で、機械のにおいに囲まれたような生活で、彼らは満足しているのだろうか。否であ

孤 不 精 耕 盤 塊 畜 異 围

る。ストックホルムの人々は、ウィークエンドには必ず車で郊外に出、機械文明からできるだけ遠ざかろうとする。ストックホルムから1、2時間の郊外には、ちょうど東京郊外の建て売り小住宅のようなものがずっと並んでいる。1軒が2、3部屋から成り、ひどく簡素なベッドと椅子・テーブル・台所用品・農具があるだけ。そしてみな20坪ほどの庭があり、そこに木を植えたり、草花や野菜を栽培して、ウィークエンドを過ごすのである。知り合いになった金髪の、バグマン¹そっくりの顔をした婦人はこう説明した。

「私たちはもちろん水道なんかなくて、水をくみに行く所が遠くて、できるだけ不便な所を選ぶのです。すべてが不便にできていて、わたしたちの労働を必要とすればするほど、わたしたちは大喜びなの。ガスもなくて、まきを集めてお料理できれば理想的なの。」

不便で簡素な田園生活へのあこがれは、ちょうど日本人の自動的に電化された高級アパートに住みたいというあこがれに匹敵する。わたしはここではじめて、わたしがストックホルムでした未開民族についての講演に彼女らがいかに熱狂したかが納得できたような気がする。彼女らにとってどんなにこのウィークエンドが重要なものであるかは、わたしたちの想像以上である。これがなければとても

生きていけないほど、重要な1週間のスケジュールになっている。これは全く習慣になっていて、わたしの帰国後、東京を訪れたスウェーデンの学者が、ちょうど土曜の夜に着いて、開口一番、わたしに言った言葉は、「きょうは郊外にいらっしゃるはずでしょう。郊外にいらっしゃる大切なあなたのウイークエンドを取りあげてしまって、心からお気の毒に思います。」わたしはおなかの中で笑いが止まらなかった。毎日どろんこの道のある郊外で、彼らのウイークエンドに使うような家に住んでいるわたしたちの大都会東京の生活は、ストックホルムから来た彼には想像もできなかったのである。

わたしの研究に奨学金を出してくれたE・W財団のプレジデントE女史は、ある日わたしにストックホルムの託児所と養老院を見学していらっしゃいといって、案内の婦人をつけてくれた。この二つの施設は社会福祉国家として有名なスウェーデンの誇るべきものである。

託児所はストックホルムの郊外の閑静な住宅街にあって、建物は庭木のある芝生しばふの庭を持った、ちょっとした普通の住宅の造りであった。案内されて中に入ると、10室ほどあって、それぞれ何歳の部屋というようにきまっていて、たとえば6歳の部屋には、6歳の

児童に最も適した絵本・おもちゃ・机・椅子をはじめ、6歳の児童に最適のあたたかい壁の色、じゅうたん・カーテンにまで細心の考慮が払われ、じゅうぶん児童教育のトレーニングを受けた若い女性が、保母として3人ぐらいの児童を専門に受け持っている。一部屋にはたいてい、一人か二人の子供がいた。

現在、ストックホルムの既婚婦人の70パーセントが職を持つといわれているほど、既婚婦人の就職率が高いため、このような託児所の施設がたくさんできている。職を持つ母は、毎日出勤前に車で子供をここに連れて来、一日、帰宅の時までここに預かってもらうのである。

この理想的に完備した託児所の一日の預り料をきいて、わたしは全く驚いてしまった。それは、わたしが当時滞在していた、ストックホルムの駅前のホテル代の二倍という高額だったのである。案内の美しい若い保母さんは、7歳の部屋で一人で何かおもちゃをいじっていた子供を指して、

「この子はもう7年も、ここで暮らしているのですよ。」

とわたしに言った。その時ふとふりかえった金髪の少年のひとみがなんと寂しそうだったことか。わたしはその人懐っこそうな、そし

て寂しい憂いの色さえ見える，まつげの長い水色のひとみに，氷の平原にいるような孤独の訴えを見て，胸をつきさされるようだった。この子は，とても自分では言えないけれども，どんなほろの汚れた服を着ていてもいいから，母のそばにいたいのであろう。幼い子にとって母の愛がどんなに恋しいものか。どんなに文明が進み，社会保障が行き届き，どんなに物質的に恵まれても，母の愛をつくり出すことはできないのである。日本の就職を望む既婚婦人は口癖のように言う，「よい託児所さえあれば。」と。託児所というものに期待するのもけっこうだけれども，あの寂しい子供のひとみに耐えられる女性は，母は，日本にいったい何人いることだろう。貧しい未亡人や，一家の生計を負わなければならない婦人にとってはもちろん理想的な施設だけれども，家にいることが経済的に可能なのに就職のためにこうした施設を利用する母たちは，よくよく考える必要があるのではなかろうか。

スウェーデンはフィンランドに次いで，早く女性の投票権を獲得した，女権運動の盛んな国である。女権運動にその半生を過ごしたある銀髪の老婦人はわたしに語った。

「スウェーデンでは，わたしたちの運動によって，ずいぶん婦人

の地位が上がり、多くの女性が社会に進出しましたが、まだ給料はどうしても女性の方が低いのです。女性は産前産後の休暇をとるため、労働力が劣るから、給料も男子と同等にできないと言いのです。そこでわたしたちが今提出しようと考えている案は、妻が出産のため1か月休暇をとる場合には、必ず夫も1か月休むことにするのです。もちろん、出産自体は女の仕事ですが、出産に関するいろいろな仕事は夫がすべきです。たとえばおむつの取り替えとか、ミルクを飲ませたり、その他いろいろの家事をすべきなのです。そのようにすれば、夫も妻も出産に当たって同じ日数休むことになり、男女の絶対労働量を等しくすることができます。そして賃金平等の基本線が出て、はじめて男女平等となることができるのです。」と。結局、男女同権、男女平等をおし進めていくということになるわけだ。わたしには彼女の意見は少し行き過ぎのような気がした。

同じスウェーデン人でも、ストックホルム大学の社会学のある先生は、全く違った考え方をしていた。家族問題が専門であるその先生は、静かな口調でわたしに語った。

「ぼくは、スウェーデンの女がめざましい社会的な進出をして、はたして何を得たかということになると、疑問ですね。むしろ得た

ものより失ったもののほうがはるかに多いのではないだろうか。たしかに女性の生活水準は上がったでしょうが、彼女らが月給で得たものは、おしゃれのための服飾品とか、より多くの娯楽がおもなものではないでしょうか。そうしたものは、彼女たちの欲望を満足させていくには、大いに役立ったでしょうが、それによって女性の魅力は増すどころか、かえって減ったと言わなければならないでしょう。彼女たちの物質的な欲望の満足のために、その子供や家族はどれだけ犠牲になったことでしょうか。女性としての本質を失ったこうしたスウェーデンの女性たちが、どんなにスマートによりよい服を着ていても、もはやぼくたちにとってどれだけの魅力があるでしょうか。」

男性側からの鋭い批判である。

スウェーデンでは、あまり豊かで平和なために、すべて少しアブノーマルだ。さきの女権運動の婦人及びストックホルム大学の教授によって代表された意見は、現代直面しつつある女性問題の両極を示しているが、ひるがえってスウェーデンの男性を見ると、少し男性的な魅力に乏しいのではないかと思われる。150年も戦争をしないで、国が豊かで社会保障が行き届くと、男性というものはかく

娛 魅 減 犠 牲 鋭 判